



トキワジムにてブルーが半強制的に計画したグリーンの誕生日パーティーも終わり、今は皆後片付けをしている最中だった。

かくいう主役のグリーンはトキワジムの（ある意味）雑然とした感じから離れたくなって外に出た。

すぐそばに手頃なベンチがあったのでそこに座って星を眺めることとした。

外は暗かった。当たり前かもしれない。ブルーが半ば押し掛けで別の凶鑑所有者を連れやってきたのが午後3時。それからカラオケだのポケモンバトルだのコンテストだのであつという間にとつともなく長い時間が流れたのだった。

とつともなく長かった。その割には感じた時間は短かった。

それほど楽しかったのだ、とグリーンは内心ほくそ笑んだ。

「グリーン」

ふと彼は彼自身の名前を呼ばれ、後ろを振り向いた。

そこにいたのは、ブルーだった。

「ブルー。どうした？ 後片付けをしてたんじゃなかったのか？」

「ひとやすみよ。ひとまずルビーとかクリスとかに任せちゃってるわ」

そう言って、彼女は今日の話を話し始めた。そのことに関して内心グリーンはほとんど呆れつつあるのだったが別に彼女の場合何をしなくてもきっと強引に話を通すだろう、と思っていたので、適当に頬杖を叩くことでひとまずの決定としていた。

「……隣、座っていい？」

ふいに、ブルーがそう言ったので。

ああ、とグリーンは了承し、座っていたベンチを少し詰めた。

「星、綺麗ね」

ブルーはそう言いながら、吐いた息を手に当てて、それで彼女の手を温めていた。

彼女の息もグリーンの息も真っ白で、寒かった。同じ感覚を共有していると思うと、グリーンはなんだか笑ってしまいそうだった。

「そうだな」

少し遅れて、グリーンも返す。

「どうしたの？」

ブルーはグリーンに問いかけた。

「ん……。なにが、だ？」

「いや、何か考え事でもしてたのかなーって」

「ああ……。ジムのことをな」

「ほんっと、グリーンっていつも仕事のことしか考えてない」

「悪かったな」

そうグリーンが返したら、ブルーは急に笑い出した。最初は堪えていたのだが、それも耐え切

れなくなり、ついには大声で笑い始めた。

「お、おい。どうした？」

グリーンは思わずブルーの方をむいて、言った。

しかし。

そのときだった。

おそらく偶然だろうがーグリーンの唇とブルーの唇が重なった。

.....

しばらく、空気が凍りついた。

まるでそこだけが絶対零度を浴びたように。

ブルーの顔は紅潮していた。今から湯気でも出てきそうなくらいに。

「.....おい」

グリーンはこの沈黙を破ろうと、ブルーに話しかけた。

しかしブルーはそのことばに反応せず走り去って、

ブルーはトキワジムの入口まで行って、振り返った。

グリーンはブルーを追いかけようと走っていたので、思わず立ち止まった。

「.....グリーン、大好き」

グリーンに聞こえるか、聞こえないかくらいの小さな声で言った。

そしてブルーは大急ぎで扉を開けて、すぐに閉めた。

星が煌めく夜空で、グリーンはぽつりつつぶやいた。

「.....うるさい女だ」

その顔は笑っているようにも見えた。



「……で、質問ってなんだ？」

グリーンはジムの待合室で、コーヒーカップを二つ持って、ソファに腰掛けた。

「もうすぐ、誕生日なわけだ」

「ああ。誰のだ？」グリーンはコーヒーを啜りながら聞く。

「明日はなんの日だ？」

「3月3日……ああ。ひな祭りだな？ ブルーにひなあられを買ってあげねば……」

「ちげーよ！ イエローの誕生日だよ！ い・え・ろーの!!」

「うるっせえよ!! お前は一体何しにきたんだ!!」

客人の正体はレッドだった。レッドはコーヒーを飲み干し（たしかホットコーヒーだったはずなのだが）何くわぬ顔で言った。

「イエローが最近おかしいんだよ！」

「イエローがおかしい……？ どういうことだ？」

「いや。だからさ、イエローがなんだか可愛くなったというか……」

「かえれ」

「話を聞いてくれよ！」

「俺はお前の惚気話を聞くために時間を設けてるんじゃない!!」

「まあまあ、話を聞いてやれよ」

「サカキ、お前どっから出てきた」

「まあまあ恋愛はいいもんだぞお？」

「語りだしたよコイツ」

「まあまあほっとけよグリーン。とりあえずイエローのところに行ってくれよ」

「……まあ、いいか。仕方ない」

「おい、ちょっと待て。俺は無視か」

レッドとグリーンは走り去り、そこには悲しそうにサカキが残るだけだった。

「……で、イエローはどこだ？」

「レッドさん？」

「イエローか？」

イエローはいつもの服装を着てはいなかった。

着ているのは、黄色いドレスみたいなやつで、うっすらと化粧もしていた。

「……なんで……だ？」

それにはグリーンも首を傾げていて。

「……だろ？」

「ううむ……。これはもしかしてアイツが」

「やっほ。どうしたの。揃いも揃って」

「噂をすればブルーがきたぞ」

「なによ？ まさかこのブルー様の美貌に惚れて……」

「今更そんなことはないから安心しろ」

「グリーン、冷たいー！ あれ、けど今更ってことは……？」

「……待てよ。そういう反応ってことはブルーじゃないのか？」

「何が？」

「イエローがこうなっちゃたの」

……？

「い、いや？ だって今日初めて会ったのよ？ それも偶然に。そんな焚きつけるみたいなこと  
できるわけないじゃない」

「そーだな。ブルーは焚きつけるのはうまいが嘘は苦手だ。特に俺にとってはな」

「……な、何を言うのよっ！」

「……待てよ。じゃあ誰が一体？」

レッドが言うと、場は静かになった。

「……レッドさん。どうしたんですか？ 顔が青ざめてますよ？」

「いや……ああ。イエロー。今から言うこと、怒らないで聞いてくれるか？」

「？」

「お前……、いつもの服はどうしたんだ？」

「ああ。いつもの服ですか？ 洗濯しちゃって。乾かないから代わりに着てるんですよ。それだけですよ？」

イエローは慌てふためくレッドを気にせず、笑った。

「ああ……。そうか。じゃあ、化粧は？」

レッドは更に質問を追加する。

「化粧？ ああ。これですか。ボク、乾燥肌なんでクリーム塗ってたんです。もしかして、白っぽかったですか？」

「い、いや……。？ 綺麗だよ。うん」

「そう言ってくれると嬉しいですっ」

そう言ってイエローは自分の家へと入っていった。

「えーと？ ……つまりどういうことなの？」

「まあ、レッドの勘違いだ。よくあることだよ」

そう言って、ふたりは（なぜか手をつないで）どこかへ消えていった。

\*\*\*

そのころ、トキワジム。

「でな、シルバーが小さかったときによくハンカチをなくしてだな……」

「へえ（ちくしょう。なんでトキワジムに入ったらグリーン先輩じゃなくてサカキがいるんだよしかも話はシル公の話ばかり！ デレデレすぎるだろ……!!）」

そんなことを考えるゴールドと、シルバーの話を破顔して話すサカキがずっと話をしていた。



「いやー、やっぱりポケスロンってのはすげえな！」

ゴールドはポケスロンの受付でゴーグルを覗いていた。

彼はかつてポケスロンに来たことがあり、全てクリアしたこともある。それもあって、

「ゴールド様ですね。本人確認のためゴールドアスリートカードを提示してください」

「へいへい、これだろ？」

そう言ってゴールドは金色のカードを差し出す。

ゴールドアスリートカードはポケスロンですべてのコースをクリアしたという称号を与えられた人間のみ渡されるカードだ。それがあれば何か特典がある、というわけではないがポケスロンのアスリート、通称ポケスリートにとっては喉から手が出るほど欲しいアイテムのひとつである。

「……ゴールド、またこんなところにいた」

ゴールドはその声を聞き、振り返ると、クリスタルがいた。

「く、クリス?! なんでこんなところに?!」

「なんでって、あんたが急に消えたからでしょう?! 探したのよ!!」

「……ったくなんだよなんで探すことがあるんだよ……」

「これから、オーキド博士と一緒にコガネのラジオ局に行って『オーキド博士のポケモン講座』の収録じゃない! 忘れたの!？」

「そ、そうだったな……」

ゴールドが下をむいて、どう言い訳をしようかと考えていると、

クリスタルが手を差し伸べてきた。

「……ん? どうしたクリス？」

「そういえば私はここに来たことはないなあ、って」

「そっか。シルバーもきたことあるんだけどな。あとは四天王とかと戦ったりな！」

ゴールドは握り拳を上げて、鼻高々に言った。

だが、クリスタルはそれを楽しいとは思えなかった。

「……ん、どうしたクリス? 大丈夫か？」

「え、えっ。大丈夫よ？」

クリスタルは見た感じ慌てていた。

しかし、ゴールドはそれに気付いたのか気付かなかったのか。

「……よーし、クリス。今からポケスロン行こうぜ！」

「え、今から!? オーキド博士に叱られるわよ?!」

「オーキドのじいさんなんてどうでもいいんだよ! ほら行くぜ！」

ゴールドはクリスタルの手を握り返し走り出した。

クリスタルはそんなゴールドを見て、少しだけ笑うのだった。

「グリーンさん！！」

「はいはい、なんだ……トキワの森の力を利用してジムトレーナーを倒してくるなよ。自分より小さい女の子に倒されて落ち込んでるんだぞ？」

「ええっ……すいません。でも、ポケモンたちには回復させましたよ？」

「お前のその笑顔が怖いよ……、で、何の用だ？」

「あのですね……レッドさんがなんだかおかしいんですっ！」

「……レッドがおかしいのはいつものことじゃ？」

「グリーンさんもそう言って～！ とりあえず見に行ってくださいよ～！」

「わかったわかった……とりあえずブルーもこい」

「えーなんで私が？」

「いいから！」

「わ、ちょ、ちょっと！ 女の子の服引っ張るとかなによ！ グリーンのバカ！ 変態！」

「どうとでも言え」

というわけで。

「レッドの家に来たわけだが」

「そうね。特に何も変わってないけど」

「……この大砲を除いては」

レッドの家にはとてつもなく大きな大砲がいくつも設置されていた。

それにグリーンは手で触り、

「おお……ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲じゃねーか、完成度高けーなオイ」

「なんでわかるんですかこの名前?!」

「いや……なんとなくだが」

「なんとなくでわかるもんじゃないでしょ?!」

「レッドはどこにいるんだ」

「そうよね。……レッドの家にはいないの？」

「あれ……さっきいたはずなのに」

ブルーとイエローは辺りを見渡す。

それでも、レッドの姿は見えなかった。

「……あいつ、どこにいったんだ？」

「おお、なにしてんだみんなここで？」

そして――現れたのはこの元凶。

レッドだった。

「レッド、これを作ったのはお前か？」

「ああ、そうだよ？」

「なら壊せ。イエローが心配してんだぞ」

「え？ そうか……すまなかった」

意外にもレッドは冷静だったので、すぐに取り外すことができた。

「さて、オレら二人は御暇するか」

「そうね☆」

「え、ええっ!？」

イエローは驚くも、それに気を取られずさっさと二人はいなくなっていく。

「……よう、イエロー久しぶりだな」

「あ、はい！お久しぶりです！」

「ポニーテールは今日はしてないのか？」

「ええ！ たまにはストレートもいいかな……なんて、アハハ」

「そっか。でも俺はまえのがいいかもなあ」

「そ、そうですかアハハ」

レッドとイエローの間に沈黙が生まれる。

それを必死に終わらせようと、イエローはあたふたしながらフリル死でもするつもりかとききほどグリーンにつっこまれたドレス（ただしレッドに突っ込まれることはなかった）の後に隠していた何かを取り出した。

「レッドさん！」

「ん、どうした？」

「これ……」

「ん、これって……ネックレス？」

「はい、貝殻のネックレスです！ なんでもハウエンのほうにある浅瀬でしか取れない貝殻で出来たもので……けどレッドさんに似合うかどうか……」

「嬉しいよ」

いきなりレッドはイエローの頭をわしゃわしゃと触ったので、イエローは思わず「ひゃん！」と声を上げてしまった。

「おっと、すまん。きゅうに……」

「いえ、レッドさん大丈夫です」

「そっか」

「レッドさん」

「ん？」

イエローは覚悟を決めていた。

レッドがイエローのほうに振り向いて、

それを狙ったようにイエローはレッドの頬にキスした。

「い、イエロー!？」

「レッドさん……大好きです！」

イエローの突然の告白にレッドは一瞬ためらって——いや、それすらもしなかった。

「ああ、イエロー。俺もだ」

そして、レッドもそう答えた。

「ついに成功したのね……！」

「なんでおれたちいつもこそこそ見てるんだろう……？」

「いいじゃない、こそこそ見てるのが面白いのよ♪」

「ま、まあ、それは否定できない」

「じゃ、次は私たちも……」

「ちょっとまって！ ブルーなぜ俺を押し倒す！ 待てそこは待てーっ!!」

2012年4月29日。

ゴールドはタマムシデパートに来ていた。

「シルバーの馬鹿……、なんで今日に限って風邪をひくんだあんにやろう……」

ゴールドは内心怒っていた。何故なら、ほんとならここにはシルバーという彼の一番の親友とともに来る予定であり、とあるものを一緒に決める予定だったのだから。

「クリスのプレゼントか……」

ゴールドは空を見上げ、呟いた。

明日は彼の大切な人、クリスタルの誕生日だからである。

\*

(7階・ぬいぐるみコーナー)

「――あいつぬいぐるみ欲しそうな柄じゃないだろうしなあ」

ゴールドはぬいぐるみコーナーに来て、ぽつり呟いた。ちなみにゴールド以外は子供、または大人（ただし子供の付き添い、である）しかいなく、ゴールドの存在はひどく違和感を感じられた。

「――別んどこ行くか……いや、けれどなあ……」

ゴールドはそんなことをぶつぶつ言っていたが。

「いや、ここで諦めなきゃ男が廃るぜ。別のところへ行こう」

そんな独り言を呟きながら、ゴールドはエスカレーターの方へ向かった。

\*

(6階・ボールコーナー)

「だからってこれは安直すぎるよな……」

というわけなので。単純にクリスタルが興味をもっているボールを買いに来たが、実際彼女ならすべてのボールを持っていそうなので、諦めた。

帰り際、チラシが貼ってあった。「なんじゃこりゃ？」

ゴールドはそれを見て、驚いた。

「マスターボール入荷するって……嘘だろ？ 次の入荷は7月予定……。あー、俺の誕生日頃にははいつてんのかなー」

ゴールドはそんなことを呟きながら――ふと喉が渴いたので、屋上に向かうため――エレベーターへ向かった。

(8階・屋上)

屋上は当たり付きの自動販売機が幾つかと子供用の遊具があった。子供なら、一日と楽しむことは出来るかもしれない。ゴールドはその脇にある休憩スペースでサイコソーダをぐびぐび飲んでた。

「あー、最近暑くなってきたなー……」

そこで、子供たちを見てふとゴールドは思った。

「そういや……あいつ塾で働いてたよな……？」

そして、ゴールドは何かを思い出したかのように、立ち上がった。

\*

次の日。

ゴールドとクリスタルはクリスタルの家で小さなパーティーを開いていた。

「しかし、シルバーのやろう、インフルエンザとは。健康管理しっかりしとけての」

「まあまあ、ゴールド。そんなこと言わないの。あとでこのケーキもってお見舞い行こ？」

「――ああ、そうだな」

ゴールドは立ち上がる。「ところで、クリス。外でねえか？」

「え？ どうして？」

「いいからいいから！」

ゴールドに背中を押され、訳の分からぬままクリスタルは外に出た。

外は昨日と同じく真夏日になるんじゃないかと思うくらい暑かった。

だが、クリスタルは特にそれをどうとは思わなかった。

「――これ」

「高かったんだぜ？」

クリスタルの目には、大きな滑り台が映っていた。

「どうして？」

「ほら、おまえ塾の仕事やってるだろ？ しかも研究の手伝いもしてるし。それで遊具が古かったから、新しいのを、と思ったわけよ！ お前もそっちの方がいいだろ？」

ゴールドがそう言うと、クリスタルは嗚咽を漏らしつつ、泣き出してしまった。

「お、おい！ 泣くなよ……」

「ごめん…。まさかゴールドがそんなに塾のことを思ってるなんて思わなくて……」

「そ、そりゃあな！」

「じゃあさ」クリスタルは顔を上げた。「明日からゴールド、塾の子守をやってよ！」  
「————はい？」

ゴールドには予想外の発言で訳が分からなかった。

「だって、こんなに塾のことを思ってくれているんでしょう？ なら、ゴールドも一緒にやりましょうよ！」

「お、俺は……」

「ね？」見るとクリスタルが涙目で上目遣いであることがわかる。男子はなぜだかこういうところには弱いのだ。

「――ああ、解ったよ」

「ほんと！」クリスタルの声のトーンが1オクターブ上昇したのが解った。「なら、絶対よ？ 約束よ？」

「ああ。男に二言はない」

「じゃあ、よろしくね！」

そう言ってクリスタルはゴールドの頬にキスをした。そしてクリスタルは中へ入っていった。ゴールドは突然のことに驚いてしばらくその姿勢を保っていた。

\*

数日後。

「ゴールドおにいちゃんあそぼー！」

「やだー！ ゴールドおにいちゃんは私とあそぶのー！」

「ぼくもぼくもー！」

ゴールドはすっかり塾の雰囲気馴染んでしまったようで、子供たちにせっつかれている。

「うふふ、人気物ね」

クリスタルはそんなゴールドを遠くから箒を持って見ている。

「クリス、シルバー！ 助けてくれー！！」

ゴールドの必死の叫びにも。

「だーめ、あなたがやるといったんだからやり切らなきゃ」

「……仕事はやりきるまでが仕事だ。例えそれがどんなに理不尽でもな」

二人の親友はそれに答えることはなかった。

おわり。



「なんで俺がこんな目に合わなくちゃならないんだろう」

俺はそう言ってひとつ溜息をついた。そう言っても仕方ないのでさっさと済ませてしまおう。こんなファンシーな店に俺もいつまでもいたくはない。

しかし……なんだって俺はあのバカップルの一日を追わねばならんのだ!!

俺がこれをする羽目になった点に関して……一日ほど時間を戻らねばならない。

「……これは？」

「言わなくてもわかるでしょ？ 日誌よ、日誌」

「いや、そういう意味じゃなくて」

「……ほんととろいわね。だれを観察してほしいか、わかるでしょそれくらい?!」

「言わないでいたが……レッドとイエローの」

「そ・の・と・お・り!!」

いきなり耳元で大声出すな、びっくりしただろう。

「……だからってゴルダックに hidroポンプを命じなくても……服びしょ濡れよ……」

「タオルがジムの奥にある」

「まじでっ？ じゃ、グリーンよろしくね☆」

そう言ってあいつはジムの奥からタオルをかつぱらって出ていった。

残ったのは――一冊のノート。

「……やるしかないのか」

あとを説明するのもめんどうだから、あとはノートでも見てくれ。それですべて説明できるだろうからな。

8時、レッド起床。目をこすり、リビングで朝食を吟味。

8時20分、イエロー迎えにくる。母の黄色い声援を背にタマムシへ。

8時40分、タマムシ着。デパートへ。

11時、昼は1階のフードコート……ではなく、大食い大会が開催されるラーメン屋へ。レッド張り切って大盛りラーメン（制限時間40分）を注文するも、七合目でダウン。イエロー苦笑い。

12時20分、ヤマブキ着。リニアでコガネへ。

12時22分、コガネ着。デパートへ。お前らショッピングしすぎだ。

13時、可愛いぬいぐるみをレッドは買おうとするも、財布を忘れる。仕方ないので、偶然を装って俺が一万円程貸してやった。明日には返してもらう。

14時、自然公園へ。虫取り大会にでも出るつもりか？

14時10分、ポケスロンへ。ゴールドと出会う。ゴールドと意気投合し、パワーコースをチャレンジ。イエローは観戦に回る。

14時40分、エンジュへ。

14時44分、チョウジへ。

14時55分、チョウジでいかりまんじゅうを購入。イエローが俺たちの分も購入していた。俺もなんか用意しておかねばな。

15時、いかりのみずうみでゴールドが100cmのコイキングを釣る。過去数年で釣れるかも怪しい大きさらしい。なんか賞状もらっていたな。

15時20分、ゴールドと分かれる。

16時、コガネ着。リニアでカントーへ。

16時02分、ヤマブキ着。

16時30分、トキワ着。イエローの家で団欒。中は見れないので何をしていたかは不明。

17時、イエローと分かれる。

17時07分、レッド家着。

以上、報告を終える。

「……なによ、これ」

ブルーは俺の書いたノートを見て、文字通り言葉を失っていた。

「……俺はお前の言うとおりにちゃんと」

「どこが?! レイエのきゃっきやうふうふシーンが書かれてないじゃん!!」

「CP名口にすんじゃねえ!! たしかにアイスをあーんとかしてたけどな?! 熱いラーメンをレッドがふーふーしてるところもあったぞ?! それを書くことか?!」

「書くことよ!! 当たり前じゃない!!」

「ふざけんな!! 人を一日使ったくせに!! あのあとカントー理事にこっぴどく叱られたんだぞ?!」

「知らないわよそんなの!! ……仕方ない、こんどはシルバーを使うかしら」

「さっさと出てけ」

おわり。

ぽけすぺごっちゃんに！ 黄

<http://p.booklog.jp/book/58257>

著者：都橋かなで

表紙イラスト：つぶあんこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokitsu333/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58257>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58257>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ